

あけましておめでとうございます

今年の干支は、巳ですが、中でも 60 年に一度の『癸巳（みずのと・み）』の年と言われています。「癸は揆なり」で、はかる（測る・図る・計画する・道・法則）という原義です。「巳（み、し）」は、胎児の形を表した象形文字で、ヘビが冬眠から覚めて地上にはい出す姿を表すとも言われ、「起こる、始まる、定まる」などの意味から、新たに出発すると意味づけされています。漢字は難しいが、奥義の発見はすこぶる面白い。歴史と先人の智慧が見事にちりばめられています。しかも、巳といえは脱皮をします。成長のために古くなった皮を脱ぎ捨てる、われわれも巳年にあやかって、脱皮、復活、再生したいものです。

病院という組織も脱皮と自己変容が求められています。そのためには今こそ、『地に足をつける』必要があります。子供の頃から暗黙知として知っているこの言葉を実践知に変換しなければなりません。医療も病院も、その存在意義と向かう方向性を見失うことなく、『地に足をつける』ことが必要です。地に足をつけるには、常に挑む力を蓄えなければなりません。わが国は現在、世界のどの国も経験したことのない高齢社会を迎えています。2011 年版『高齢社会白書』によると、65 歳以上の高齢者人口は 2,958 万人で、総人口に占める高齢化率は 23.1%に達しています。今後、人生 65 年時代から人生 90 年時代に向けた発想とシステムの転換が求められる中で、医療と介護の線引きが出来ない“不確実性”の中で、われわれの病院は日夜、急性期医療を遂行しています。不確実なヒトを対象にヒトによる不確実な医療を行っています。超高齢社会の複雑性、多様性、不確実性の中で、医療の確実性を追い求める過度の期待という重圧に押しつぶれそうになりながら、日夜医療は止まることを知らない。今一度、日本人の「美德遺伝子」を覚醒させなければなりません。“おかげさまで”、“ありがとう”。日本人が、滋賀県人が大切にしてきたこの言葉がもたらす笑顔と感謝、これこそが超高齢社会の医療と介護に光をもたらししてくれると信じたい。子供たちが世界に胸の張れる cool Japan 魂を成長させるのが楽しみです。

われわれの病院では、創立 75 年の節目に際して、大津市民病院経営計画（平成 24～30 年度）をスタートすることができました。昨年 6 月には従来からの ISO9001（国際標準化機構）に加えて病院機能評価 Ver6.0 の県下初のダブル認定を受け、今年 2 月には卒後臨床研修評価機構を受審し、さらなる医療の質向上に挑みます。現在、オーダーリングシステムから遅ればせながらも電子カルテ導入に向けた最終設計段階に入りました。院内挙げての歴史的大事業ですが、変わる事への反発と変える事への期待が倒錯する中で、組織的自己変容と

組織としての挑む力の結集を垣間見る楽しみが出来ました。ありがたいことです。大津市民病院 Next Stage—『市民とともにある健康・医療拠点』をあるべき病院の姿として、再生の象徴といわれる巳年にあやかって、『地に足をつけて』病院の在り方、医療のあるべき姿をふまえ、大きな一歩を踏み出したいものです。

大津市民病院経営計画（平成 24～30 年度）-Next stage

【目指す方向性とあるべき病院の姿】

市民とともにある健康・医療拠点

【7 つの基本方針】

- ① 質の高い医療を効率的・安定的に 24 時間 365 日提供する病院
- ② 幅広く市民の健康をサポートする病院
- ③ 患者やその家族の気持ちを感じ取り行動していく病院
- ④ 地域の医療機関が患者のために協働したくなる病院
- ⑤ がんばりたい医療スタッフをひきつける病院
- ⑥ しっかりとした経営感覚を持った病院
- ⑦ 目標を設定し、持続的に進化する病院

皆様方の温かいご支援を宜しくお願いいたします。

平成 25 年 1 月

大津市民病院長 片岡慶正